

三者間グループ会話場面での unaddressed recipient の役割 —接触場面と母語場面における会話参加プロセスの分析—

The role of the unaddressed recipient in three-party group conversation: An analysis of the process of conversational participation in Japanese contact and internal situations

大場 美和子 (千葉大学, 社会文化科学研究科)

Miwako OHBA (Chiba University,

Graduate School of Social Sciences and Humanities)

Abstract

This research aims to find out the different participating processes in two types of group situations, namely internal situations which involve three native speakers of Japanese, and contact situations which involve two native speakers and one non-native speaker of Japanese. The focus of the discussion is placed on the conversational roles of the unaddressed recipient (Goffman 1981) in each group.

The data comprises of 20 free-talking sessions, each of which were approximately 20 minutes in length and were held among three acquaintances. 12 sessions were conversations in contact situations while 8 were Japanese internal situations, and all were both video and audio recorded. It was observed that one of the three participants in each group tended to become an unaddressed recipient, and that the conversation was usually developed by two participants rather than by three. On the discourse level, the findings show that a similar participation structure was developed as a result in both internal and contact situations but the processes undergone appear to be different. Firstly, in native situations, the roles of both listeners were different while one participant was speaking because of their different degree of shared knowledge on topics of conversation. In contact situations, however, 1) one non-native listener tended to remain as an unaddressed recipient because of their language inability, such as not understanding the contents; 2) one of the two NSs chose to remain as an unaddressed recipient because the other NS was taking a supportive role in order to let the non-native participant to participate in the conversation by frequently asking questions. In spite of this unbalanced conversational roles among participants, it is found that participants in all recorded conversational sessions evaluated their own participation positively in the process of solving problems occurred in the course of conversation.

1. 研究の目的

本研究では、接触場面 (NNS 1 名, NS 2 名) と母語場面 (NS3 名) の三者会話において、表面上は共通するかに見える会話参加であっても、実は、その参加のプロセスが、両場面において異なる点を、参加者の 1 人が 'unaddressed recipient' (Goffman 1981) となるプロセスを中心に

分析することを目的とする。

日常会話は、通常、話し手と聞き手の相互行為により作られていく。しかし、三者会話では、1 人の話し手に対し 2 人の聞き手が存在し、役割の交替が複雑となる。更に、3 人のうちの 1 人が非母語話者（以下、NNS、母語話者は NS）の場合、言語能力の差という、会話参加の前提に関わる問題が参加者間に生じ（村岡 2003）、役割の不均衡な配分が発生する。本研究では、接触場面と母語場面における 3 人の参加者が、役割の不均衡な配分が発生する中で、様々な役割を担いつつ果たす動的な会話参加の、異なるプロセスを分析する。更に、この参加のプロセスを、会話参加者自身が、いかに評価していくのかも合わせて考察する。

2. 先行研究

ネウストプニー（1981, 2002）は、接触場面と母語場面の違いを指摘し、接触場面における NNS の遭遇するコミュニケーション問題を研究し、接触場面における NNS の行動について、効果的な対策を立てる重要性を主張している。つまり、接触場면을日本語教育の出発点と到達点とし、学習者が遭遇する接触場면을日本語教育の基盤におくことにより、学習者を中心とした日本語教育を行うことを主張しているといえる。この接触場面の研究の枠組の 1 つが言語管理理論である（Neustupný 1985a, 1985b, ネウストプニー 1995）。

本研究が分析対象とする接触場面の会話の特徴として、参加者が会話参加の規範を部分的には共有していない点が指摘できる。接触場面における会話参加のための規範は、会話の使用言語である日本語や参加者の母語規範を適用するだけではなく、会話場面におけるその場その場の参加者の相互行為により、基底規範（Neustupný 1985b）を構築していく過程であると考えられる。よって、接触場面における会話参加の分析には、その会話時における、その場その場の参加者の会話参加に対する意識を含めた分析が必要である。つまり、観察が容易である可視的なプロダクトの分析だけではなく、表層には現れない、実際の相互行為時における参加者の意識を合わせて分析を行う必要がある。以上の観点から、本研究は次の 2 つの研究方法、1）質的研究の 1 つである Grounded Theory（Glaser and Strauss 1967 = 後藤・大出・水野訳 1996）、2）言語管理理論におけるフォローアップ・インタビュー（ネウストプニー 1994）、を参考とする。

更に、本研究が分析対象とする会話は、参加者三名による多人数会話である。つまり、従来数多く行われてきた二者間による会話を分析対象とした先行研究では捉えきれない、多様な現象が観察されることが予想される。よって、多人数の相互行為を分析対象とした先行研究を参考とする。

以下、2. 1 において Grounded Theory とフォローアップ・インタビュー、2. 2 において多人数による相互行為の分析に関する先行研究を概観する。

2.1 質的分析による接触場面の研究

Grounded Theory は社会学における質的研究の方法の 1 つである。これは、質的データを重視し、データ間の徹底的な比較を行うことによりデータにおける諸特徴を抽出し、そこから研究領域に即した理論産出を試みる方法である。つまり、そこにあるデータからの新たな理論産出が目的であり、既存の理論の数量的検証を主たる目的とはしていない。ただし、質的データと量的データを対立させるのではなく、両者が相補的に、相互検証的に用いられ、同一の主題に

関する異なった形態のデータとして利用することにより, 理論検証と理論産出の両方に役立つ, という立場をとっている. そして, 「どちらのデータを優先するかは, 調査事情, 調査者の関心と訓練, それから調査者が自分の理論のために必要とする資料の種類などに依存しているにすぎない」としている (Glaser and Strauss 1967 = 後藤・大出・水野訳 1996 pp. 21-22).

本研究は, 前述の通り, 会話参加者自身が, 会話参加のための規範を部分的には共有していない接触場面を分析対象としている. よって, 記録されたデータを, 従来行われてきた会話・談話分析の研究成果をそのまま応用し, 理論検証し, 解釈するにとどめることはできない. 記録による可視的なデータに, 参加者自身の相互行為時における意識を合わせて扱う必要があり, この点で, 質的分析を行うべき分析対象であると考ええる. よって, 本研究では, 日本語による接触場面と母語場面における会話参加を比較することにより, 両場面に共通もしくは異なる諸特性を抽出し, その意味を考察するという点で, Grounded Theory を参考とした質的研究の立場をとる.

質的研究の対場をとり, 参加者の会話参加時の意識を探る方法の 1 つとして, フォローアップ・インタビュー (ネウストプニー 1994) を採用する. ネウストプニー (1994) は, ポスト近代においては, 社会におけるバリエーションが重視されるようになったことに伴い, 研究においても新しい方法論が生み出されたとしている. つまり, プロダクトだけでなくプロセスを重視するようになったと述べている. これに伴い, 新しい研究方法も生み出されることとなり, その 1 つがフォローアップ・インタビューである. フォローアップ・インタビューは, 「データの記録の時点での参加者の意識を調べる方法」である. ここには, 「人間が行動する瞬間の意識はその行動の一部であり, それなしにはその行動を理解することができない」 (pp. 11) という考え方がある. 本研究でも, 実際の会話データ収集に合わせてフォローアップ・インタビューを行い, 参加者の会話参加時の意識を分析に加える. これにより, 会話参加者間の相互行為によって, 会話参加がいかに果たされていくのかというプロセスの分析を試みる.

2.2 多人数会話の相互行為にみられる役割の不均衡な配分

高梨他 (2004) は, 会話分析の立場から, 多人数会話における話者交替や参加者の役割を再考している. これによると, 二者会話では現行の非話者が次話者になると考えられるが, 3 人以上の多人数会話では, 2 人以上の聞き手 (次話者候補) が存在し, 次話者の選択は, 相互行為を行っていく上では重要な問題となるとしている.

異なる複数の聞き手(受け手)については, Goodwin (1981), Goffman (1981) も詳細な分析を行っている. まず, Goodwin (1981) は, 会話の受け手について, 参加者の情報保有の観点から分析を行っている. これによると, 会話中, 話者は, 'knowing recipient (話の内容を知っている受け手)' と 'unknowing recipient (知らない受け手)' という, 受け手の知識の状態を考慮しながら会話を展開しているとしている. 本研究の三者会話の場合, 受け手は 2 人となり, この 2 人は現行の話題に対し同等の情報を保有しているとは限らない. よって, 話し手自身は, 聞き手の反応や背景知識によって発話を変え, 更にこの話し手の言語行動の変化は聞き手の参加にも影響を与えられとされる. 次に, Goffman (1981) も聞き手の概念について下位分類を行っている. まず, 参加者を 'ratified participant (参加を承認された参加者)' 'unratified participant (参加を承認されていない参加者)' に分け, 更に 'ratified participant' については 'addressed recipient (話しかけられた受け手)' と 'unaddressed recipient (話しかけられていない受け手)',

‘unratified participant’ については‘bystander（傍観者）’と‘eavesdropper（盗み聞きする人）’としている。

本研究では、会話参加者 3 人は 1 つのテーブルを囲んで話しており、基本的に全員 *ratified participant* である。ただし、1 人の話し手に対し異なる聞き手が 2 人存在し、どのような聞き手として参加するか、話し手は異なる複数の聞き手に対してどう話すか、会話の進行に伴い、参加者各自が異なる役割を担いつつ参加の調整を行うと考えられる。例えば、1 人が *unknowing recipient* の場合、現行の話題に積極的に参加できずに *unaddressed recipient* となり、話者と 1 人の *knowing recipient* の 2 人で会話が進行する現象が予測される。

更に、3 人のうちの 1 人が *NNS* の場合、参加者間に言語能力の差ができ、話題の理解や発話の困難さという、会話参加の前提に関わる言語能力の問題が生じる（村岡 2003）。つまり、接触場面における三者会話とは、参加人数による相互行為の複雑性に、言語能力の問題が加わり、参加者間に役割の不均衡な配分が発生するといえる。

本研究では、会話への参加とは、参加者が様々な役割を同時に担いながら相互行為を行っていくプロセスであると捉える。そして、接触場面と母語場面における 3 人の参加者が、役割の不均衡な配分が発生する場面において、様々な役割を担いつつ果たす会話参加の、異なるプロセスを分析する。この際、録音・録画によるプロダクトの記録に、フォローアップ・インタビューによる参加者の会話参加時の意識を合わせ、質的な分析を行う。以上により、両場面における会話参加のプロセスを明らかにすることを目的とする。

3. データ

分析対象は、知人関係 3 人による 20 分程度の雑談で、日本語による接触場面（*NNS* 1 名、*NS* 2 名）12 組と母語場面（*NS* 3 名）8 組である。参加者は全て大学所属の学生である。調査は、2005 年 5 月から 2006 年 1 月にかけて行った。会話は全て録画・録音により収集し、全て文字化を行った。また、後日、参加者全員に個別にフォローアップ・インタビュー（以下、*FUI*）を行った。収集した会話に関する情報は、以下の、表 1～3 に提示する。

接触場面における *NNS* の言語能力は中級レベルとし、中級の前半と後半にわけて収集した。*NNS* の学習歴、滞日歴、母語などには統制を加えず、調査時点で言語能力が中級レベルであること、三者の人間関係が顔見知り程度であることを条件とした。レベルは *NNS* が所属する日本語のクラスにより判断した。中級と知人関係を対象としたのは、参加の多様性が観察されると予想したためである。

まず、中級レベルの学習者は、日本語教育の現場では多数存在し、中級という枠組み自体にも幅がある。よって、中級の前半と後半に分けて収集した。また、中級レベルは、上級のように自力で会話参加を管理できるほどではないが、初級のように *NS* から多くの支援を受けるわけでもない、不安定な言語能力の段階であると考えられる。次に、知人関係による会話は、初対面のようにある程度決まった話題を話せばいい会話や、友人関係のように会話での役割が固定し、個人的な情報が共有され、参加者間の規範が既に構築されている会話とはならず、その場における相互行為に敏感に反応しながら会話参加を調整しなければならない。つまり、言語能力、人間関係ともに、多様な参加が観察されると予想される対象を選択したといえる。

三者間グループ会話場面での unaddressed recipient の役割（大場）

なお、NNS の母語に統制を加えなかったのは、参加のバリエーションと接触場面の特徴を明らかにするためである。母語統制のない様々な背景を持つ NNS の参加する接触場面において、何らかの共通する特徴が抽出された場合、それは接触場面における特徴といえる。また、坂本（2005）は、第二言語習得研究の立場から、学習者の誤用の原因を安易に母語干渉であると判断することを批判し、「母語干渉判定基準」の提案を行っている。つまり、「二言語間の対照研究だけではなく、他言語を母語とする学習者の習得状況、更には学習者の目標言語を母語として獲得する幼児の母語獲得過程をも考慮に入れて、複眼的に考える必要がある」と主張している（pp. 286）。本研究は、習得研究を行うことを目的とはしていないが、接触場面における会話参加を、様々な背景を持つ NNS の参加から複眼的にとらえるという点で、坂本（2005）と同様の立場である。

表 1：接触場面 中級前半 NNS 1 名と NS 2 名による会話 6 組

記号	国籍	母語	年齢	在学資格	NS との関係
前半①	タイ	タイ語	20 代前半	短期留学	授業
前半②	中国	中国語	20 代後半	研究生	授業
前半③	デンマーク	デンマーク語	30 代前半	短期留学	サークル
前半④	カナダ	英語 (best), 中国語 (first)	10 代後半	短期留学	パーティー
前半⑤	ドイツ	ドイツ語	20 代後半	短期留学	サークルと授業
前半⑥	ブラジル	ポルトガル語	30 代前半	短期留学	留学生支援

表 2：接触場面 中級後半 NNS 1 名と NS 2 名による会話 6 組

記号	国籍	母語	年齢	在学資格	NS との関係
後半①	モンゴル	モンゴル語	20 代前半	修士 1 年	チューターとサークル
後半②	インドネシア	インドネシア語	20 代前半	短期留学	授業
後半③	中国	中国語	20 代後半	修士 1 年	ゼミ
後半④	韓国	韓国語	30 代前半	教員研修	ゼミ
後半⑤	タイ	タイ語	20 代前半	短期留学	授業
後半⑥	ロシア	ロシア語	10 代後半	短期留学	授業

表 3：母語場面 NS 3 名による会話 8 組

記号	在学資格	3 人の関係
NS①	学部生	同学部
NS②	学部生	同学部
NS③	学部生	同学部
NS④	学部生	同学部
NS⑤	学部生	同サークル
NS⑥	学部生	同サークル
NS⑦	学部生	同学部
NS⑧	学部生	共通の友人, 同サークル, 短期留学, 同学部, 同高校出身

4. 分析

本研究では、先行研究で述べたように、接触場面と母語場面における会話参加を、参加者が様々な役割を同時に担いながら相互行為を行っていくプロセスとして捉え、質的な分析を行う。参加者が様々な役割を担うことによって果たされる会話参加には、相対的なまとまりが観察される。しかし、このまとまりを、文字化した資料の内容的なまとまりによって区分した場合、プロダクトとして出された会話を、調査者という第三者の視点から、内容の内部構造によって区切ることとなる。つまり、会話参加者の相互行為によって果たされた会話参加のプロセスを捉えきれないとは考えられない。しかし、参加者間の相互行為によって果たされていく会話参加の動的なプロセスには、参加者の役割を提示する様々な言語的・非言語的要素が出現すると考えられる。よって、参加者の役割の分析は、参加者の役割を提示すると考えられるディスコースマーカーや非言語行動などの分析によって特定し、更に FUI による検証で判断した。以下、この方法について例をあげて方法について具体的に述べる。

例(1)は、母語場面 (NS⑦) の会話である。芸能人のレイザーラモンネタである「フォー」が、まだ流行しているかどうか、各自の経験をもとに話している場面である。まず、NS3 が「でも」というディスコースマーカーによって「フォー」に関する話題を開始し (383-384)、3 人で頻りにターンを交替し、相互に話し手となりながら参加を果たしている (383-392)。次に NS1 が「なんか」というディスコースマーカーと「私さ」により、自らの経験 (合宿免許) を語ろうとする (393)。しかし、NS2 も同様に免許合宿に行った経験があり、「うん私もいったよ」と NS1 の方を向いて発話したため、NS1 と NS2 の 2 人によって会話が進行する。この結果、合宿免許に直接関係がなく、情報を共有していない NS3 は *unaddressed recipient* となる (394-400)。ただし、NS3 は合宿免許の話題自体は理解しており、視線を 2 人に向け、最後に笑い (400)、話題に対する参加態度を提示している。一方、NS1 は「それでさー」とまたディスコースマーカーにより合宿免許の話題を再開し (401)、NS1 が話し手となり、2 人の NS に向けて自らの経験を話す (401-408)。この合宿免許の話題の終了部において、NS2 はお茶を飲むことによってターンを取得する意思のないことを提示する。一方、NS3 は「んーでもなんかこの前ねー」とターンを取得し、話し手となって自分の経験を述べる (410-416)。この「んーでもなんかこの前ねー」(410) が発話された際、NS1 と NS2 は NS3 に視線を向け、聞き手としての参加を提示する。この NS3 の話題終了後、NS1、NS2 も特に新情報を提示することなく、主に NS2 と NS3 が、NS3 の語った経験に対する評価を述べている (418-428)。そして、NS1 は「あ今さ私ん中で」と、「フォー」とは直接関係のない流行について話題を開始する (429)。この「フォー」からの話題の移行に関して、NS1 は、FUI において、そろそろ「フォー」に関しては言い尽くしたからと報告した。また、他の 2 人も、418-428 の部分はなんとなく間を埋めていたと報告し、話題の終了の調整を参加者間で行っていたことがわかる。

三者間グループ会話場面での unaddressed recipient の役割 (大場)

例(1) 母語場面 NS⑦

	NS1	NS2	NS3
383		/フォー/	でもフォーはね、なんか
384			知らないけどうけてるよね
385		んー	
386	フォーもね↑はやった↑		
387	はやってる↑けっこう		
388		はやってる↑はやった↑	
389	はやってる↑		
390		[もう終わりがち↑]	[やってる人は]けっこういるよね
391			終わりがち↑
392		終わりがち↑	
393	なんか私さ9月に免許の合宿		
394	行っててー[その時にー]	[うん私もいったよー]	
395	まじでーとれたー↑		
396		9月、とれたとれた	
397	免許しょでこんにちはしよう		
398		ん↑	
399	免許しょで/こんにちはしよう	/ん/	
400			{笑}
401	それでさー終了検定とか		
402	あるじゃーん/	/あー/	
403	あれでさーここにいる		
404	人達はみんな受かりました		
405	とかいった時にフォー		
406	っていってて		
407	[[笑]]	[え↑]	[[笑]]
408	その時ははやってたのかな		
409		そこがピークだったのかなー	
410			んーでもなんかこの前ねー
411			高校の同窓会があってー
412	うんうんうん		
413			なんかー男がーしりー
414	/んー/		私立大の人なんだけどー/
415			ずっとフォーフォー
416			いったたよ{笑}
417	[[笑]]	[へー↑]	[[笑]]
418			ずーっといって
419		ずーっとフォーフォー↑	

420			ずーっとフォーフォー
421		すっげー	
422		すごいなー	
423			すごいパワーだよ
424		{笑}	
425			ずーっとフォー
426	[[今もじゃ]]	ねー[疲れるよねー]	
427	使うのかなフォーフォー		
428		[使える]よ、使うんじゃない↑	[ね]
429	あ今さ私ん中で		

以上、例(1)の 383-428 の部分において、3 人の会話参加者は「フォー」という話題について話しているという認識であることが FUI からわかる。1 つの話題において、参加者は役割を変えつつ（話者、addressed recipient, unaddressed recipient）、異なる参加を果たしていることが観察される。以上のように、参加者自身が認識していると考えられる会話の内容のまとまりの特定を行い、そのまとまりにおける参加者の役割を観察した。この結果、接触場面と母語両場面の両場面において、1 人が unaddressed recipient（以下、UR）の役割となり、三者会話であるものの、2 人で会話が展開する様子が観察された。

この UR は、2 人の会話には現れえず、3 人による会話であるからこそ観察される役割である。これは、接触場面と母語場面という、本質的に異なる（ネウストプニー1981, 2002）とされる両場面において、表面上、同じ参加が果たされているといえる。しかし、1 人が UR という役割となった背景をみると、この参加のプロセスは両場面で異なっていた。つまり、まず、母語場面では、話題に対する共有知識や情報保有の違いにより 2 人の聞き手の役割が異なっていた。一方、接触場面では、1) 話題の内容が理解できないという NNS の言語能力の問題、2) 1 人の NS が NNS を会話に参加させるため NNS に積極的に質問などを行い、結果として、もう 1 人の NS が UR となった、という言語的な役割調整が影響していた。

以下、4. 1 で母語場面、4. 2 で接触場面において、1 人が UR の役割となり、3 人の参加者が存在しながらも二者間で会話が展開する会話参加のプロセスについて述べる。

4.1 母語場面における UR の役割

母語場面では、主に、話題に対する共有知識や情報保有の違いにより 2 人の聞き手の役割が異なり、また、話し手の発話の方向も異なっていた。ただし、単純に情報保有の有無だけが関わっていたわけでもなかった。以下、4. 1. 1 において情報保有の有無が直接関わる場合、4. 1. 2 において情報保有の有無だけでなく他の要因との関連がある場合、について述べる。

4.1.1 情報保有の有無が関わる UR の役割

まず、情報保有の有無が直接的に関わる例について述べる。例(1)でも、合宿免許に関する情報のない NS3 が UR として参加していた (394-400)。例(1)は比較的短いですが、例(2)のように比較的長く二者間で会話が展開することもある。例(2)は、NS3 が昼食後に情報収集室でドーナツについて調べたこと、更にこの調査をまとめるレポートについて話している場面である。NS2 は

三者間グループ会話場面での unaddressed recipient の役割 (大場)

このレポートが課された班には所属しておらず、情報非保有者である。NS2 は、発話を行わず、2 人を見ながら話を聞くという UR の役割で参加を提示している。しかしこの話題の後半 (67 以降)、レポートの書き方に関連して小論文と論文の違いという一般的な内容になる。そこで、NS2 はふざけて「長さじゃない」(78) と発話する。この後、3 人はそれぞれ同様の冗談めかした発話を行いつつターンを取得し、3 人が交互に話し手となって参加する (78-90)。

例(2) NS②

	NS1	NS2	NS3
56			っていうかさ、さっきさ
57	/ん/		M がおにぎり食べて/
58			そのあとねー情報収集室
59	/うん/		行って/インターネットで
60	/あー/		ドーナツ調べたの/
61			でドーナツをいっぱい
62	/{お腹すく}/		見ながら{お腹へった}/
63			途中でお腹{がなった}
64	ドーナツって調べられる		
65	もんなんだね		
66			{笑}(wh けっこう集まった wh)
67	すご[ーい]		[[でもさー]]ほんとにあれ
68			レポートの書き方がね
69	あーわかんない		
70	なんか小論文ぽくても		
71	いいみたい		
72			ね小論文ぽくのがいいの
73	/わかんない/		かな/論文ぽく書いた
74			ほうがいいのかな
75			それともさ、なんかこう
76	え論文と小論文の		
77	違いが{わかんない}		
78		長さじゃない	
79			うん
80	な、長さ↑		
81		小論文は短い	
82	ちっちゃい、んだよ		
83		ちっちゃいんだよ[{笑}]	[[{笑}]]
84		[小さい論文なんだよ]	[[{笑}]]
85	小さい論文なんだよ		
86		短い	

87	コンパクトに		
88		そう	
89			そうかー
90	[へー]		[へー]

4.1.2 情報保有の有無が直接関わらない UR の役割

ここでは、2人の聞き手はともに情報非保有者であったものの、1人だけ UR となった例について述べる。例(3)は、3人の学部先生(S)に子供が生まれたという話題を NS2 が提示した場面である。NS3 は驚きを示すあいづちや評価的発話を連発し、聞き手として会話への積極的な参加を提示している。また、姿勢も前傾となり、言語的・非言語的に話題に対する関心を示している。一方、NS1 は、子供の性別を確認する質問を行うものの(560)、あとは「へー」というあいづちのみで(564, 569)、特に話題に対する積極的な関心は示さない。また、視線も下に落として髪をいじっており、非言語的にも積極的な参加態度は提示せず、UR として参加している。FUI において、NS1 は、実はこの先生が好きではなく、この話題には乗り気になれなかったことを報告した。しかし、NS3 の「パパになったんだついに」(572)によって話題中の先生の子供がはじめての子供であることが判明すると、それに関連して積極的に発話を行い、UR の役割ではなくなる。結果、3人が話し手として頻繁にターンを取得する参加となる(572-594)。

例(3) NS⑦

	NS1	NS2	NS3
557		S に赤ちゃん	
558		生まれたんだよ	
559	[そうなんだ]		[えー↑]
560	女↑		
561		これ知ってたー↑	
562			うっそー
563		女	
564	[へー]		女ー[すごい溺愛しそう]
565		ねー	
566			わー
567		すごい溺愛してるらしんだけど	
568			んー
569	[へー]	[超隔離してるっていうか]	
570		[表面には]	へー[そうなんだ]
571		見せないみたいな	
572			パパになったんだついに
573	あ今までいなかったんだ		
574	普通に[なんか]子供	[うん]	

575	とかいるイメージだった		
576		いやいやいやいや	
577	いないんだー		
578		いないいない	
579			いなかった
580	えじゃまだ若いの↑奥さんとか		
581		奥さん、うん、[若い]	[[へー]]
582			年下を捕まえたんだじゃ
583		後輩↑みたいな、感じ	
584	え先生自体も若いー↑		
585	そうでもない↑		
586		先生ー40ー/いくつだろう	/ぐらい/
587		実はもう 45 とか	
588	それぐらいなら生殖は		
589	{できるんだよね}		
590	[[笑]]	[[笑]]	[[ねー]]{笑]}
591	[[笑]]	[[なんだそれー]]	[[笑]]
592		できるんじゃないん↑	
593	それぐらいならまだまだかー		
594		んー	

次に、例(4)は、NS2 のサークル（準硬式野球）について話している場面である。NS1 と NS3 は NS2 の所属サークルについては知っていたが、詳細についてはともに情報非保有者である。しかし、NS1 が質問により話題を開始し（816）、NS2 が答えながら 2 人で会話が展開する（816-843）。この結果、NS3 が UR となり、NS3 は 2 人に視線を向け、あいづちをうちながら（824, 826, 835, 841, 843）、参加を提示している。

この場面は、調査者が会話終了の合図を行った後であり、参加者はそれぞれ会話終了を意識していたものと考えられる。特に NS3 は、サークルの話題終了後、「どうしようかな」（844）「そろそろかなー」（845）と述べ、会話を終了させることを提案している。NS1 と NS2 はそれに同意を示し、お茶を飲むなどして、ターン取得の意志がないことを提示する（846-848）。しかし、NS2 が「キャラメルコーンだっけ↑」とテーブルの上のお菓子を食べたことをきっかけに、このお菓子について新たな話題を提供する（849）。これに対し、NS3 は、「また始まっちゃったよー」と驚いたことを FUI において報告した。ただし、この話題自体もおもしろかったことも合わせて報告した。FUI から、NS3 は、会話の終了を意識し、あえて UR という役割で参加していたと考えられる。

例(4) NS⑧

	NS1	NS2	NS3
816	準硬式一だっけ↑		
817		そうそうそうそう	
818	ちょっと柔らかいのボールが		
819		なんかねー硬式の球にー	
820		こうゴム球が	
821	ついてる↑		
822		うんついてる	
823		だから大きいちょっと	
824	[へー↑]		[へー↑]
825		なにもかわんないと思う	
826			そうなんだ
827		うん	
828	千葉大は軟式も硬式も		
829	あるのー		
830		あるー	
831	あ3つあるんだ{笑}		
832		うん	
833		でもなんかねー、ボールも	
834		違えば人も違う感じがする	
835	[ふーん]		[へー]
836	一応全部見学には行ったの↑		
837		うん、ん↑	
838	/うんうん/	硬式は一噂を、とかで/、	
839		ちょっと厳しそうだったから	
840	ふーん		
841			ふーん
842		んー	
843			そっかそっかー
844			どうしようかな
845			そろそろかなー
846		ね	
847	ね		
848	1	1	1
849		キャラメルコーンだっけ↑	

以上、母語場面において1人がURの役割となる会話参加のプロセスについて、2人の聞き手の情報保有の違いが、URという役割に関連する点を述べた(例(1)(2))。しかし、NSは現行の話題において何が起きているのかを理解しており、話題に対する情報量に過不足が存在し

ていても、NS は参加の提示を自ら管理している様子も観察された。例えば、例(3) では話題に対する関心、例(4)では会話終了の調整のために、あえて、UR という役割で会話への参加を果たしている様子が観察された。NS は、進行中の話題において、どこで参加もしくは不参加を提示するのか判断ができ、また実際にその判断にもとづき役割を調整し、参加を管理していたと考えられる。

4.2 接触場面における UR の役割

接触場面においても、母語場面と同様に、情報保有度の違いにより、2 人の受け手が異なる役割で参加を果たすプロセスが観察された。しかし、母語場面にはない接触場面でのプロセスとしては、1) 話題の内容が理解できないという NNS の言語能力の問題、2) 1 人の NS が NNS を会話に参加させるため NNS に積極的に質問などを行い、結果として、もう 1 人の NS が UR となった、という言語的な役割調整の影響により、UR という役割になっていた。以下、4. 2. 1 において NNS の言語問題、4. 2. 2 において NS による NNS への積極的な参加支援の影響について述べる。

4.2.1 NNS の言語能力の問題

NNS の言語能力の問題にも、NNS が話題の内容を十分に理解できない場合と、NNS の発話が NS にとって理解できない場合とがある。まず、NNS が話題の内容があまり理解できず UR となった例について述べる。例(5)は、NS2 が旅行先のイギリスで軟骨を食べたこと、鶏肉以外の肉は食べないことを話している場面である。NS2 の話題を開始する発話 (118-199) は、NS1 と NNS の両者に向けられたが、122 以後の内容を NNS は理解できなかったことが FUI からわかった。NS1 は、軟骨を食べることは普通のことだと考えていたため、NS2 の経験に対して同意を示し、NS1 と NS2 で会話が発展する。この結果、NNS は UR となる。視線により参加態度は提示しているが、あいづちやうなずきなどはみられず、日本語の規範からは、参加を提示しているとはとらえにくいものである。その後、NNS が「わからない{笑}」(136) と話題が理解できないことを表明し、NS2 はドイツのソーセージを話題とする (137)。しかし、ソーセージの話題から NS2 が鶏肉しか食べないという内容になり、NNS は UR の役割のまま、視線を発話者に向けつつ参加を提示している。その後、NNS は「ぎゅうぶたー」 と NS の発話の一部を繰り返す (154)。この「ぎゅうぶた」に関する理解が不十分であったために、2 人の NS からの積極的な説明を引き出し、3 人はターンを交替しながら話者として参加を果たす。このため、NNS は UR の役割ではなくなる。つまり、言語問題により UR となったものの、NS の発話の一部を利用して発話するという、問題を利用して別の役割として参加を果たしたといえる。

例(5) 前半 NNS⑥

	NS1	NNS	NS2
118			私も一、なんかロースト
119			チキンを出されたことがあって
120	ローストチキン		

121		うんうんうんうんうん	
122			でー、ばらしてみんな
123			肉だけ食べるしよ↑
124			そこの一軟骨一残ってた
125	/うん/		からーぼりぼり食べてらー/
126			イギリス人の家庭で
127	[[うーん]]		[だったからー]えそんな所
128	[[えー]]		食べるの↑[って]いわれて
129	[普通]だよねー	[あー]	
130	うちからしたらねー		
131	[食べる食べる食べるよね]		[うんずっとぼりぼり食べてた]
132	/うーん/		骨/、カルシウムがいっぱい
133	骨食べるんだよねー		
134			{笑}
135	うーん		
136		わからない{笑}	
137		/umh/	ドイツはーソーセージとー/
138	[ソーセージ]うまいよね↑		[ザワークラフト]
139	ドイツのソーセージ[は]		[[私ねー]]
140	/ん/		実は鶏肉以外の肉は/、
141			食べないんだ
142	あそうなの↑		
143			うん
144	へー↑		
145			私はー鶏肉以外の肉は
146			食べないんだ
147	えぎゅうぎゅうとかぶたとかも		
148			ぎゅうぶた食べない
149	まじでー↑		
150			ん
151	え↑全部食べる↑		
152	ぎゅうぶた、あたし		
153	全部食べる		
154		ぎゅうぶたー↑	

例(5)のように NNS が話題の内容を理解できないだけでなく、NS が NNS の発話内容を理解できずに UR となる場面も観察された。例(6)は、NNS が日本語の作文を書く際の日本人との違いについて述べている場面である。NS1 は NNS の「NNS が漢字だけを使用して作文を書く」という発話内容が理解できず、あいづちを 1 回うつ (561) ほかは、視線を向けるだけで積極的な参加を提示することができずにいる。FUI でもよくわからなかったと報告した。一方、NS2

は「日本人がめったに使わない漢字を NNS が使用する」という解釈を提示する (566-568, 570-573). この間 NS1 は UR となっている. NNS は NS2 の解釈に対し同意を示し (576), NS1 もこれに納得する (577). FUI から, 実はこの一連の解釈にも誤解があったことが判明したが, 参加者は, NNS の言わんとしたことが「わかった」という理解に達した認識となっている.

この話題終了後は, NS2 が新しい話題を提供し, 2 人の NS は addressed recipient として参加する. 話題の転換が役割を変えて参加する契機となっていることが観察される.

例(6) 前半 NNS⑥

	NS1	NNS	NS2
553		ですから一例えぱー	
554		日本人のーセンテンスー/	/うん/
555		はーとてもー長いー	
556			{長い}
557		はいはいはい長いじゃない、	
558		でもーたくさん平仮名を使う	
559		[私は]漢字だけ使います	[[んー]]
560			んー
561	んー		
562		とーこれはー日ー本語のー	
563		書き方ーじゃないと思います	
564		[[XX ようにー]]	えーじゃー[普段日本]
565		blahblahblah、blahblahblah	
566			例えばー、日本人が滅多に
567		[(咳払い)]	使わない[ー]漢字ーを
568			使うこともある↑
569		もう一度	
570		/うん/	日本人私達が/あまり
571		/はいはい/	使っていない漢字を/
572		/うんうんうん/	文章に書きちゃってー/
573			わからないっていわれたり
574		あー	
575			する↑
576		そうですねー[{笑}]	[うん]
577	へー↑		

4.2.2 NS による NNS への積極的な参加支援

前半 NNS の場合, NNS の言語能力の問題から, NS が NNS に対して積極的な参加支援を行い, この結果, もう 1 人の NS が UR の役割による参加となることがある. 例(7)は, NS1 がサークルで弾くビオラ (726-754) について話している場面である. NNS がビオラとバイオリンの違いがわからなかったため NS1 がバイオリンとの違いを説明する. しかし, この説明自体が

多文化共生社会における言語管理

NNS にはわからなかったため、楽器の名前を確認し (741), 743 以降, 電子辞書で「ビオラ」を確認する. NS1 は辞書を覗き込んで単語入力を手伝う. このビオラの説明から辞書での語彙の確認の間, NS2 は UR の役割となり, 2 人のやりとりを見ている. ビオラの語彙の問題が解決すると, NS2 は楽器の話題に関連させて, NNS が専門の試験で弾くピアノに関する質問を行い (755), 以降は NS2 が積極的な支援を行い, NS1 が UR となる.

例(7) 前半②

	NS1	NNS	NS2
726		何の楽器、今ー↑	
727	えとビオラっていう楽器		
728	なんだけどー		
729	バイオリンーわかる↑		
730	[[バイオリン]]よりー	バイオリン[わかる]	
731	一回りーおっきい弦楽器		
732	で、こう肩にのせて弾く		
733		え↑バイオリンーと	
734		同じじゃない	
735	ちょっと、なんか音ーの		
736	高さがービオラの方がー		
737	5 度、低い		
738	5[度っていうとー]	[[なんの名前]]	
739	5 度っていうとー		
740	わかりずらいか		
741		あ楽器は何の名前↑	
742	えとビオラ		
743		ビオラ	
744	ん		
745	ヒに点々でいいと思う		
746		ビーオーラ	
747	ビオ		
748		ビオラ	
749	ビ、オ、ラ		
750	うん、そうそうそう		
751	[ん]	[あ]ーあ、わかった	
752	ん		
753	うんうん		
754			んー
755			ピアノやってんだよね↑

以上, 接触場面における, NNS の言語問題と NS による NNS への積極的な参加支援, によ

り 1 人が UR の役割となる 2 つの会話参加のプロセスについて述べた。NNS の言語能力の問題や NS による参加支援の背景には、NNS の内容の不理解や発話が十分にできないという、従来、否定的に捉えられてきた問題が指摘できる。これらの問題は言語管理理論からみると、逸脱の発生である。しかし、FUI において個々の問題に対する否定的評価は報告されなかった。西阪 (1997) は、理解の不一致、つまり、言語運用上の不一致は、志向の一致を確認していく作業となり、積極的な機能を担いうることがあると指摘している。確かに、例(6)(7)では参加者は共通の理解を目指し、相互交渉が起こり、会話が展開していた。また、例(5)では、NNS がわからない語彙の一部を繰り返すこと自体が、別の役割による参加のきっかけとして機能していた。会話中にいわゆる問題は生じるが、その問題に対し、参加者なりの解決を得ていくこと自体が、会話参加につながっていると考えられる。

5. 考察

接触場面と母語場面の両場面に共通して、1 人が UR の役割となり、三者会話であっても、2 人で会話が展開するプロセスについて述べた。表面上、接触場面と母語両場面において、同じ役割による参加が指摘できるものの、この参加のプロセスは両場面で異なる点を述べた。ここでは、更に、母語場面と接触場面の両場面に共通する参加が観察される意味について、言語管理理論を参考にしつつ、NS と NNS の視点から分けて考察する。

まず、NS にとっては、母語場面と同じ参加が、表面上、接触場面においても果たされるということとなり、母語規範による参加が接触場面においても可能となっていると考えられる。例えば、NNS が UR になったとしても、参加者間で果たされる参加のプロセスは、母語規範に従っていると認識される。よって、第三者には、役割の不均衡な配分が会話参加に反映され、否定的評価につながる会話参加であるかに見えても、参加者自身にとっては、自らの規範に従った参加が果たされていると認識しうると考えられる。NNS が UR の場合、NS の接触規範が働いて、質問などにより、NNS の参加を促すこともあるが、これは母語場面でも観察された。一方、NNS にとっては、自身の母語規範とは異なる日本語の規範による会話が展開していた可能性がある。しかし、UR という役割になることは、NNS 自身が会話参加を強制されず、自由な会話参加が保障されている状態にあったと考えられる。FUI から、話題の内容の理解自体は、参加者間に誤解があることが判明した。しかし、参加者自身は会話参加時において参加者間の共通理解が構築されたと意識していたことも同時に判明した。NNS が UR となり、2 人の NS で会話が展開していても、その場において自身は 2 人の NS の話を聞く役割にあること、更に、NS の会話を聞いて理解しているという意識が NNS にあったと考えられる。

Fan (1994:247) は、相手言語接触場面の場合、NS と NNS の間に「言語ホスト・ゲスト」の関係が成立し、NNS は言語ゲストとして NS に問題の解決を求め、NS は言語ホストとして会話の維持や理解の確立を支援することを指摘している。村岡 (2003:247) は、この言語ゲストと言語ホストという役割の意味について、「参加機会の対等性を動機とする役割調整」であると指摘している。更に、「対等な参加機会が成立しているとみなせるかどうかは、参加者が自分と相手の役割を適切と考えるかどうかにかかっている」と述べている。

この「対等な参加機会の成立」の認識と会話参加に対する参加者の評価の関係について考察する。母語場面・接触場面ともに、会話終了直後や FUI において会話の印象を聞くと、参加者

はほぼ全員「楽しかった」と肯定的評価を述べた。特に接触場面の会話に参加した NS が、調査者に対し、会話の機会を提供してくれたことに感謝することが多くあった。また母語場面の参加者も、久しぶりに話せたことや近況について聞いたことに対して「よかった」という肯定的評価を感謝とともに報告した。具体的な理由とともに発せられた「楽しかった」といった評価は、調査者に対する単なる社交辞令ではないと考えられる。逆に、「頑張りました」「大変だった」といった比較的否定的な評価は、中級前半 NNS に対して、話題提供のために積極的に質問を行うなど、頻繁に参加支援を行った NS から報告された。ただし、会話全体に対してではなく、積極的な支援を行っていると NS がみなしている場面に限定した評価であった。例えば、前半①の NS2 は、会話の前半に対して大変だったと報告したが、会話の後半については NS1 が話題提供などにより話してくれて嬉しかったと述べた。しかし、FUI におけるビデオ再生時に、実際には会話後半でも沈黙が生じていたことに NS2 は驚いていた。つまり、実際の記録されたプロダクトとしての参加と、参加者の参加時の認識には違いがあることがわかる。上記の比較的否定的な評価を FUI で報告したのは、NNS に対する積極的な参加支援の結果、「対等な参加機会の成立」が保たれていないと NS が留意した結果であると考えられる。しかし、この評価は会話全体に対してではなく、参加者自身が積極的な支援を行ったと認識している部分に限定されていたといえる。

第二言語習得論では、NS と NNS 間の意味交渉によって、インターアクションの問題が解決されるだけでなく、NNS の言語習得や会話の進行の促進についても関連が分析され、NS のインプットの種類や頻度などが分析されている。このような会話中の意味交渉の研究に対し、van Lier and Matsuo (2000:267) は、会話を構造的に見た場合、頻繁な意味交渉は、会話上の問題が多数存在することであり、意味交渉自体は成功であっても、会話自体はうまく行われていないことを意味すると述べている。しかし、これはあくまでも第三者の観察による解釈であり、会話参加者自身の会話参加に対する意識とは常に同じものにはならないと考える。まず、前述の前半①の NS2 のように会話に対して部分的な評価を行うこともあり、参加者が、常に、自らの参加した会話の全体を振り返って会話参加を評価するとは考えられない。また、問題発生とその解決のプロセスは、会話参加時において参加者がどのように意識していたかを探る必要があると考えられるためである。

本研究で分析したように、三者会話であっても、1 人が UR の役割となり、2 人で会話が展開することもある。これは、第三者からの視点では、「対等な参加機会の成立」が保持されておらず、不均衡な役割の配分が再構築されているように観察される。しかし、会話における役割を参加者自身が適切に果たしているという認識があった場合、会話の「対等な参加機会の成立」が認識され、「楽しかった」という会話の肯定的な評価につながると考えられる。これは、記録された発話資料だけでなく、参加者の会話時における意識を含めた質的分析を行うことにより、明らかになったと考える。

6. まとめと今後の課題

本稿では、接触場面と母語場面における三者会話を対象とし、参加者の 1 人が UR の役割となり、2 人で会話が展開するプロセスの分析を行った。表面上、両場面において同じ参加が観察される点、しかしながら、その参加のプロセスは異なる点を指摘した。また、会話に問題は

発生しても、その問題に対し、参加者なりの解決を得ていくこと自体が、会話参加や参加の契機となっている点を指摘した。以上の分析をもとに、第三者には問題が発生し、役割の不均衡な配分が反映されているかに見える会話参加であっても、参加者の認識は異なる点を、言語管理理論を参考に考察し、参加者自身の「対等な参加機会の成立」の認識と会話参加に対する肯定的評価の関係を考察した。

今後の課題としては、まず、UR が役割を変化させながら別の役割として会話参加を果たすプロセス、そのプロセスで生じる逸脱と調整について詳しく分析することがあげられる。この分析をもとに、接触場面と母語場面の比較、更に接触場面では中級前半と後半の比較を行うことが指摘できる。更に、これらの分析を通し、会話参加後に参加者が会話に対して肯定的評価となる過程とそれが言語管理理論においてどのような意味を持つか考察を行いたい。日本語による接触場面と母語場面において、会話参加のプロセスが異なる点を言語管理理論から見直した場合、接触場面では日本語の会話参加の規範から逸脱していると考えられる。しかし、この逸脱が肯定的評価となる場合、管理のプロセスがいかに働いているのかはまだ十分には明らかにされていないと考える。

Neustupný (1996) は、接触場面の研究は、問題の発生などに伴った否定的評価だけでなく、肯定的評価についても分析すべきであると指摘している。接触場面の研究は問題の発生とその解決に注目がおかれる傾向にある。しかし、参加者自身の「楽しかった」という評価によって表現される会話参加自身の会話参加に対する認識の過程を明らかにしたいと考える。

文字化の規則

[]	同時発話
[[]]	同時発話のうち、重ねた方の発話
//	ターンを取得しない発話
/	ターンを取得しない発話が発話された位置
{笑}	笑い
{ }	笑いながらの発話
↑	上昇イントネーション
XXX	聞き取り不能部分
数字	沈黙の秒数
、	ごく短いポーズ
()	咳などの非言語行動
(wh wh)	ささやき声での発話

参考文献

- 坂本正 (2005) 「母語干渉判定基準—五つの提案—」『シリーズ言語学と言語教育 第4巻 言語教育の新展開 牧野成一教授古希記念論集』ひつじ書房 pp.275-288
- 高梨克也・伝康晴・榎本美香・森本郁代・坊農真弓・細馬宏通・串田秀也 (2004) 「多人数会話

- における話者交替再考ー参与構造とノンバーバル情報を中心にー」『社会言語科学会第13回大会発表論文集』社会言語科学会 pp.144-153
- 西阪仰 (1997) 「間身体的関係のなかの対象」茂呂雄二編『対話と知 談話の認知科学入門』新曜社 pp.79-100
- ネウストプニー, J. V. (1981) 「外国人の日本語の実態(1)外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45 日本語教育学会 pp.30-40
- ネウストプニー, J.V. (1994) 「日本研究の方法論ーデータ収集の段階ー」『待兼山論叢』28 日本語学篇 pp.1-24
- ネウストプニー, J. V. (1995) 「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7 大阪大学文学部日本学科 (言語系) pp.67-82
- ネウストプニー, J. V. (2002) 「インターアクションと日本語教育ー今何が求められているかー」『日本語教育』112 日本語教育学会 pp.1-14
- 村岡英裕 (2003) 「アクティビティと学習者の参加ー接触場面にもとづく日本語教育アプローチのためにー」宮崎里司／ヘレン・マリOTT『接触場面と日本語教育 ネウストプニーのインパクト』明治書院 pp.245-259
- Fan, S. K. (1994) Contact Situations and Language Management. *Multilingua*, 13-3, pp.237-252
- Glaser, B. G., and Strauss, A. L. (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Chicago: Aldine Publishing Company. (後藤隆・大出春江・水野節夫訳 (1996) 『データ対話型理論の発見』新曜社)
- Goffman, E. (1981) *Forms of Talk*. University of Pennsylvania Press.
- Goodwin, C. (1981) *Conversational Organization: Interaction Between Speakers and Hearers*. Academic Press.
- Neustupný, J. V. (1985a) Problems in Australian-Japanese Contact Situations. J. Pride (ed.), *Cross-Cultural Encounters: Communication and Mis-communication*, Melbourne: River Sene Publications, pp.44-64
- Neustupný, J.V. (1985b) Language Norms in Australian-Japanese Contact Situations. In Clyne, M. (ed.) *Australia, Meeting Place of Languages*. Pacific Linguistics. pp.161-170.
- Neustupný, J. V. (1996) Current Issues in Japanese-Foreign Contact Situations. In International Research Centre for Japanese Studies (ed.), *Kyoto Conference on Japanese Studies 1994*, 2 pp.208-216
- Van Lier, L. and Matsuo, N. (2000) Varieties of Conversational Experience Looking for Learning Opportunities, *Applied Language Learning*, 11-2 pp.265-287